



299

講談社現代新書

生きるということ



この混迷の時代にあつて

生きるとは、

人を愛するとは、

どんな意味を

もつのだろうか。

苦闘の過去をもち、

人生の悲しみを見つめてきた著者が、

故郷の母のこと、わが子のこと、心に残る出来事などを通して、

生きてあることの意味を自ら問い、静かに語りかける――。

水上勉

貴重な体験と透徹した作家の眼に

裏打ちされた味わい深い書である。

生きるということ

昭和四七年二月二〇日第一刷発行

著者——水上 勉

©Tutomu Minakami 1972 Printed in Japan

発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話〇三—九四—二二 振替東京三三〇

装幀者——杉浦康平＋辻修平

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

●——定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえます

水上勉

生きるつらさ

講談社現代新書

目次

1	—生きるということ……………	5
	生きるということ	6
	勇気の要ること	21
	生きる顔つきについて	34
	「悲しみ」の復権	44
2	—「愛する」ということ……………	63
	「愛する」ということ	64
	父親の沈黙	68
	客をもてなすということ	72
	あさましく生きる時代	80

3 — 自然のこころ……………91

若狭の山と海 92

木挽き話 103

棕鳥よ 115

4 — 破戒坊主の感想……………133

雲水に帰れ 134

良寛さま 151

破戒坊主の感想 174

あとがき 205

松島図（部分）——俵屋宗達筆——フリーア・ギャラリー（米）



1—生きるふし—

生きるということ

粗末な木の橋のこと

小さい頃、母はよく、谷の奥へ私をつれて行って、蓑一枚ぐらいしかない小さな田の畦にすわらせ、自分は胸までつかる汁田で苗を植えていた。この谷は暗くて、一日に陽が三時間ほどしか射さなかった。村でもきわめて貧しい谷であった。そんな谷の口に私たちの家があった。谷には畑もあった。そこで、母は芋や大根をつくった。ここへゆくのに、深い川が一つあった。木橋がかかっていたが、大水のたびによく流失したので、母はよく橋普請した。自分だけの働く谷だから、村の衆にたのめる工事ではない。宮大工の父がその日はかならずどこからか帰ってきて、山から丸太を二本伐ってきて、せまい川にさしわたし、その上へ栗材のコロをならべて、流土を積むと、私たち兄弟にも踏ませて赤土の固い土橋にした。一年ほどすると土橋は古ぼけてわきに草が生え、草の下に、神社の軒タルキをみるような、栗材の切口が白くなら

んだ。また、これが古くなると、栗材はくさって、橋の裏には椎茸しいたけがいっぱいできた。母はこれを穫とって私たちの弁当のサイにしてくれた。母は、自分一家の収穫のための谷田へわたされた橋を、その生涯に何ど架かけただろう。若狭はずいぶん台風のすぎる所だから、おそらく十回ぐらいは架けたと思う。いつ架けても、この橋は丸木の切り口の上に土のもられた、椎茸のみのる橋であった。

私は、九歳でこの母に別れた。京都の寺へ小僧に出たからだ、故郷のことを思うと、母の架けていた橋が臉まぶたにうかんだ。今日も、それはうかぶ。旅をしていて、汽車が、似たような山の谷をすぎると必ずうかぶ。ああ、日本という国は、どうして、こんなに似た谷や山が多いのか。青森でも、四国でも、九州でも、わが在所ざいしょの谷と似た谷をみた。それらのいずれの谷にも、奥へゆくと、小さな橋が架かっているだろう、と私は思ったものだ。

ささやかな、みのりのために、母が心つくして架ける橋。それは、私たち一家の主食を得るための、つまり、命の橋であった。だのにどうして、あの橋は、あれだけ粗末に出来ていて、美しかったのだろう。

今日、村上華岳や富岡鉄斎とまでゆかなくてもいい、田舎絵師の描いた山水画を見て、そこに、丸太の切口のみえる草のはえた橋が描かれていると、つい涙ぐんでしまうのだ。

熱田の精進川に裁断橋という古い橋が架かっている。そこに、次のような彫字のある青銅の擬宝珠ぎぼうしがある。銘文は次のようにみえる。

てんしよう十八ねん二月十八日、をたはらへの御ぢんほりをきん助と申まうす、十八になりたる子をたたせてより、又ふためともみざるかなしさのあまりに、いまこのはしをかける成なり、はゝの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、いつかせいしゆんと、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人は、念仏申給まうしたまへや、卅三年のくやう也

小田原の陣に豊臣秀吉にしたがって出陣して死んだ堀尾金助という若者の三十三回忌の供養のために母が架けた橋である。いまこの橋は、人びとの商工の道のために恩恵をほどこしていて残存する。私がこの橋に泣いたのは、ずいぶん前のことだが、読者はこの私をセンチメンタルだと思われるか。

誠実な心情によって架けられた橋は美しい。とりわけ、ここ裁断橋の銘文は、日本人ならはらわたを刺されずにはおられまいと思う。

コンクリート文明の世界

はじめにこんなことを書いたのは、科学文明が月旅行を予測させるほどすすみ、日本の道路

に架けわたされる橋もみなコンクリートで、東名高速や、他のハイウェイをみてもわかるように、巨大である。道路を、鉄道を、川を、谷を股^{また}いで、レジャーに生き急ぐカー族のためにある。コンクリートの橋も、大勢の工夫たちの力を集めてつくられた。何々組の請負^{うけおい}とはいうものの、じつは、この工事が、青森や、秋田から農閑期を利用して出稼ぎにきた、若者たちの土の手によってつくられていることを思えば、やはり、文明の架橋も、裏には椎茸こそ生えないうが、働き手の哀話はつきぬように思う。これは、千里ヶ丘で開かれた万国博の、化物屋敷や石油コンビナートを連想させるあの建物などの場合もそうである。前衛芸術家どもの手すさびの図面をみて、じつは汗して働いた北海道開拓村の出稼ぎ者が土の手でつくったことを記憶する人は少ない。開会式の前日に、工事で死んだ二十幾人かの慰霊祭があった。それらの遺族が、みな、私の母のような、田舎者の顔をして列席して、おいおい泣いていたのを、私はテレビでみて、落涙している。

数寄屋橋という東京の銀座と有楽町のあいだに架けられていた橋がある。つい、先年までは、そこにドブ川のような濠^{ほり}があった。いつか、この濠は埋められたが、いま、この橋ならぬコンクリートの近代道路を走る車の中にあって、濠に埋まっている松の木のことを考える人は

少ない。じつは、あの川を埋めるのに、石ころや屑物や土壌を投げこんで盛りあげ、それにセメントをかぶせ塗ったと解する人も多いだろうが、そんな生^{なま}やさしいものではなかった。あの川は、昔からあった。あれは川であった。濠^ほとはいうものの、流れていたのである。あの流れの底に、近代工学は、数万本の松の木を立枕式にならべて埋め、その上へ砂土をもりあげて、今日の道路をつくっている。コンクリートではくさるからである。松の木は、水につかれ、数百年はそのまま生きているといわれる。そのことは、飛驒^{ひだ}高山や萩の町の、古い民家の柱や、はり木を見てもわかることだし、奈良や京都の寺院をみてもわかることだ。長命なものは、すべて、生きた木がつかわれているのである。

はなしついでだが、丸の内に三菱通りといわれた赤煉瓦のビルが昔はあった。あれは寿命が長かった。しかし、煉瓦造りはみにくい、といって、いま近代風な高層ビルが新装あらたに道ゆく人の眼をうばっている。しかし、あれはみなコンクリートであって、松の木よりも寿命の短かい代物^{しろもの}である。古いビルや、戦後早々に建ったコンクリートビルをみてみるがいい。廃墟とまではゆかなくとも、哀れな荒廃をみせてしまっているではないか。2DK、3DKとい、人びとはマンションを求めて血まなこだが、じつは、この頃の内装用の壁板は、すべて合板^{ゆえ}故に、あれに火がつくと、毒ガスだ。煙を喫^{くも}ただけで昏倒^{こんどう}してしまう。寿命の短かいコン

クリート文明は、消防庁のいう木造否定とは皮肉な裏面を露出して、恐ろしい毒ガス発生源の家屋構成だといったら言いすぎだろうか。私は十年前に建ったコンクリートの中程度のアパートに友人をもっているが、そこをたずねると、漬物桶の匂いと、水あげの力不足による給水の不完全設備のために、空中に現出したスラム街のように糞くさいのに驚かされる。だが、友人は、越さない。ローンがすんでいないからである。

私たちが失ったもの

都市化の波に農村も洗われてゆく。その都市化とは、人口移動もちろんあるけれど、手っとり早く言えば、コンクリート建ての工場や住宅の進出である。合理化された農田経営は、手不足や、労働意欲のないわがまま百姓の物ぐささを助長して、アメリカでは毒ガスとして戦争用につかわれていたDDTを撒くことまで虫を殺し、毎年水銀入り米の豊作を告げている。これでは、古米も、古々米も売れのこるのは当然のことであって、票田を確保するためには、いまの当番政府は、如何にしても、この農民の強引な言い分もきかねばならないのだ。米があまっています米の値が高い。むかしから、あまったものはただ同然ときまっているではないか。悪政の見本のようなものだが、しかし、これも、コンクリートの中で、議事がすすめられて、土に

ついた、真の国家愛にみちあふれた、裁断橋の架橋者の母の心の、爪の垢ぐらい吞ませてやりたい代議士どもによって取りきめられるのだから、致し方もない。政策から精神が欠け、稔りから栄養が欠け、米にも水にも毒物が混る国に、じつとがまんして生きる市民は気の毒というしかない。

生き甲斐を求めて、さまよい歩く青年が、鵲のように、新宿や六本木に現われ、彼らが、みな、言いあわせたように、わが故郷の若狭へむかし、餅もらいにきた、働くことがきらいで零落していったとみうけられる乞食のようなスタイルになったのも、偶然ではない。人間は、そう進歩するものではないのである。まやかしの文明こそ進歩らしい姿をみせるが、それは、根が浅い。科学や物に価値観をみて、心の問題をセンチメンタルだとうしろへ押しやった戦後教育の二十五年のしっぺがえしが、これほど、悪魔的な形相を示して、あらゆる人間の表にも内面にもふき出物のようにウミを出しはじめた時代はめずらしい。

読売新聞の紙上で、大岡昇平氏は、反米宣言をやった。安保反対ではない。コメを喰うことへの反対である。それと静岡茶にDDTがあったことや、何やかやで毒物の混らない食物を漁っている（あさ）と金が高くつくと奥さんにどなられ、「ノイローゼじゃない、いっぺん診てもらったら」

とお嬢さんにもわられ、まったく、狂いそうだとその文章をむすんでおられた。大岡氏ならずとも、都民はぜんぶがこの狂いの一步手前にある。

アメリカ向けの自動車にだけ、鉛害のないスタイルのエンジン車をとうに輸出していて、日本では、ハイオクでないと走れないように、設計していた大メーカーもあったとか。人を殺してでも金が欲しい企業がすでにあつたのである。政府はこの企業援護で浮き身をやつし、口では人命尊重をいうが、チッソなど、水俣病みなまたびょうをおこして、狂い死にさせた人の補償金を出ししづつしているが、それを政府はだまって眺めている。これでは、人殺しの加担者であろう。政府がそうなら、静岡刑務所では、人殺し犯人にテレビ、ピストル、小刀までさし入れていた役人もいた。世の中より役人が狂ってきている。不心得者がまかり通つて、心得た者がだまってそれを見ている。

生き甲斐のことを考えると、もう厭世感をもよおしてきて、何も考えることをやめ、このまま、この地獄の世に、死んでゆこうと、臍はらを固めている老人もいくたりか、私は知っている。日本は、いまや、こゝろを失なつた、狂人の国である。経済成長だけを呪言のようになえているうちに奈落ならくへ落ちたのだ。

自然を奪ったのは誰か

「静かに水をたたえる池に石を投げこんだときのように輪をえがいてひろがってゆく毒の波……石を投げこんだ者は誰か。死の連鎖をひきおこしたものは誰なのか。天秤てんびんの一つの皿にはコガネムシのすきな葉をのせ、片一方の皿にはいろんな色の羽のあわれな残骸さんがい、殺虫剤の毒の一斉射撃に倒れた鳥の残骸をのせたのは誰か。空とぶ鳥の姿が消えてしまってもよい。虫のいない不毛の世界こそいちばんいいと、みんなに相談もなく殺虫剤スプレーを決めた者は誰か。そう決める権利が誰にあったのか。いま一時的に、みんなの権利を代行している役所の決定なのだ。何百万、何千万という人が、ぼんやり何も気づかぬうちに決めてしまったのだ。自然の美しさ、自然の秩序ある世界——こうしたものが、まだまだ大勢の人間にふかい、厳然たる意味をもっているにかかわらず、一握りの人間がことを決めてしまうとは……」

『沈黙の春』の著者レーチェル・カーソン女史はアメリカの人である。アメリカを先進の手本として、何もかも、古品や美術品をうりわたして媚こびる国民に、女史のことばを少しでもきいてほしい。

何のことではない、われわれの生活から、生きてゆく心をうばったのは、DDTとプラスチックなのである。

新潟県の柏崎から海岸へ約三里ばかり、北へゆくと「三里浜」という砂丘がある。晴れた日は眼の前に佐渡がみえる所だが、この三里の砂丘に、白く点々と光るものがある。ここは潮流のかげんで、日本海の漂流物が集まる浜である。

猫か犬でも死んでいるかと、物好きに、砂の中を歩いていった。みると、それはポリエチレンの容器とプラスチックの種々雑多の物と、ビニールのフロシキや、いわゆる合成品の化物が流れよっているのだった。聞いてみると、むかしは、ここに流木がながれてきた。石や瓦もながれてきた。時には、漂流船の捨物や、難破船の残骸もあった。だが、犬や猫や、たまに流れていた人間の死体などとともにいち早く土に化した。鉄や石や瓦やコンクリートも風化して土になったり風になったりして消えたが、現代の魔物だけは、製造当時の、目盛り板や、凹凸をそのままに、傲然^{ごうぜん}とそこに土になることを忘れて生きている……という。私はここに、日本海へ捨てた家族たちの台所を思い、そうして、それらが、土になれぬかなしみを抱いている声をきいたように思う。

合理主義は、一切の学問に反映して、低い鼻を高くみせるためプラスチックを挿入する美容医学から、死にかけた人の心臓をうばって、他の人の命を助けたり、また、試験管で培養され